

日蓮大聖人御書全集

じょうれんぼうごしよ

浄蓮房御書

新版
2016
〜
2021

じょうれんぼうごしよ

浄蓮房御書

けんじがんねん

建治元年（'75）

がつ 6月27日

54歳

じょうれんぼう
浄蓮房

さいみかたびらひと

おく た そらら お

細美帷一つ、送り給び候い畢わんぬ。

ぜんどうおしよ

もう ひと

かんど

りんし

もう

くに

ひと

善導和尚と申す人は、漢土に臨淄と申す国の人なり。

ようしよ

とき

みつしゆう

もう

くに

みようしよ

もう

ひと

し

幼少の時、密州と申す国の明勝と申す人を師とせしが、

か

そう

ほけきよ

じよみよきよ

そんちよ

われ

どくじゆ

ひと

彼の僧は法華経と浄名経を尊重して、我も読誦し人を

勧

ぜんどう

おし

ぜんどう

なら

し

もすすめしかば、善導にこれを教ゆ。善導これを習つて師の

ぎよ

かこ

しゆくじゆう

あん

ごとく行ぜしほどに、過去の宿習にやありけん、案じて

い

ぶつぼう

むりよ

ぎよ

き

したが

みなりやく

云わく「仏法には無量の行あり。機に随つて皆利益あり。

きよう

教いみじといえども、機きにあたらざれば、虚むなしきがごとし。

われほけきよう ぎよう

わ き かな

されば、我法華經を行ずるは、我が機きに叶かなわずば、いかん

きよう

よ

おも

があるべかるらん。教きようには依よるべからず」と思おもつて

いっさいきようぞう

い

りようげん

と

きよう

取

かんむりようじゆきよう

一切經藏に入り、両眼を閉じて經をとる。觀無量壽經を

え

ひけん

きよう

い

みらいせ

ぼんのう

ぞく

得たり。披見すれば、この經きように云いわく「未來世の煩惱ぼんのうの賊

がい

もの

しようじよう

ごう

と

とううんぬん

の害がいするところとなる者もののため、清淨しよくじようの業ごうを説とく」等云々。

けごんきよう

にじよう

ほけきよう

ねはんぎよう

ごじよう

「華嚴經は二乗のため、法華經・涅槃經等は五乗にわた

大 旨

しようにん

まつぼう

われ

れども、たいしは聖人しようにんのためなり。末法まつぼうの我われらがためなる

きよう

かんぎよう

限

經はただ觀經かんぎようにかぎれり。

しやくそんさいご

ゆいごん

ねはんぎよう

過

か きよう

釈尊最後の遺言には涅槃経にはすぐべからず。彼の経

しちしゆ

しゆじよう

つら

だいいち

みず

い

すなわ

もつ

には七種の衆生を列ねたり。第一は『水に入れば則ち没す』

いっせんだいにん

しろうじ

みず

い

このかた

い

の一闡提人なり。生死の水に入りしより已来いまに出でず。

たと

たいせき

たいかい

な

い

みおも

う

譬えば、大石を大海に投げ入れたるがごとし。身重くして浮

なら

つね

かいてい

あ

じようもつ

な

かぶことを習わず、常に海底に有り。これを常没と名づく。

だいに

い お

もつ

もう

たと

み

ちから

第二をば『出で已わつてまた没す』と申す。譬えば、身に力

あ

う

習

い

お

い

有りとも、浮かぶことをならわざれば、出で已わつてまた入

だいいち

いっせんだ

ひと

いっせんだ

りぬ。これは、第一の一闡提の人にはあらねども、一闡提の

じようもつ

な

だいいち

い

お

もつ

ごとし。また常没と名づく。第三は『出で已わつて没せず』

もう しょうじ かわ い
と申す。生死の河を出でてよりこのかた、没もつすることなし。

しやりほつとう しょうもん だいし おお すなわ
これは舍利弗等の声聞なり。第四は『出で已いわつて即ち

じゆう だいご ほう かん だいろく あき ところ だいしち ひがん
住す』、第五は『方を観ず』、第六は『浅き処』、第七は『彼岸

いた とう だいし だいご だいろく だいしち えんがく ぼさつ
に到る』等なり。第四・第五・第六・第七は縁覚・菩薩な

り。

しやかによらい よ い たま いちだいごじ きょうぎよう と
釈迦如来、世に出でさせ給いて、一代五時の経々を説か

たま だいさんいじよう ひとびと すく たま お だいいち す
せ給いて、第三已上の人々を救い給い畢わんぬ。第一は捨て

たま ほうぞう びく あみだぶつ 受 取
させ給いぬ。法蔵比丘・阿弥陀仏これをうけとつて、

しじゆうはちがん おこ むか 取 たも じつぼうさんぜ ほとけ しゃかぶつ
四十八願を発して迎えとらせ給う。十方三世の仏と釈迦仏

だいさんいじょう　いつさいしゅじょう　すく　たも　阿弥陀ぶつ　だいいち
とは第三已上の一切衆生を救い給う。あみだ仏は第一。

だいに　むか　たも　いままつだい　ぼんぷ　だいいち
第二を迎えとらせ給う。しかるに、今末代の凡夫は、第一。

だいに　あいあ　じょうようだいし　てんだいだいしとう　たしゅう
第二に相当たれり。しかるを、浄影大師・天台大師等の他宗

にんし　わきま　くほん　じょうど　しようにん　う
の人師は、このことを弁えずして九品の浄土に聖人も生

おも　あやま　なか　あやま
まると思えり。誤りが中の誤りなり。

いっこうまつだい　ぼんぷ　なか　じょう　さんぼん　ぐうだい　はじ　だいじょう
一向末代の凡夫の中に上の三品は遇大、始めて大乘に

あ　ぼんぷ　ちゅう　さんぼん　ぐうしろう　はじ　しようじょう　あ　ぼんぷ
値える凡夫。中の三品は遇小、始めて小乘に値える凡夫。

げ　さんぼん　ぐうあく　いつしろうあく　つく　むけん　ひほう　あらぼんぷ　りんじゅう
下の三品は遇悪、一生悪を造り、無間・非法の荒凡夫。臨終

とき　はじ　かみ　しちしゆ　しゅじょう　わきま　ちじん　ゆ　値
の時、始めて上の七種の衆生を弁えたる智人に行きあい

て、岸の上の経々をうちすてて水に溺るるの機を救わせ
給う。観経の下品下生の大悪業に南無阿弥陀仏を授けたり。

されば、我一切経を見るに、法華経等は末代の機には

千中無一なり。第一・第二の我ら衆生は、第三已上の機の

ために説かれて 候 法華経等を末代に修行すれば、身は苦

しんで益なし」と申して、善導和尚は立ち所に法華経を抛

げすてて観経を行ぜしかば、三昧発得して阿弥陀仏に

見参して、重ねてこの法門を渡し給う。四帖の疏これなり。

導云わく「しかるに、諸仏の大悲は、苦なる者において、

こころ

じょうもつ

しゅじょう

みんなん

すす

心ひとえに常没の衆生を愍念す。ここをもつて、勧めて

じょうど

き

みず

おぼ

ひと

すみ

浄土に帰せしむ。また、水に溺るるの人は、急やかにすべ

偏

すく

きし

うえ

もの

なに

からくひとえに救うべきがごとし。岸の上の者は何をもつ

すく

うんぬん

い

じんしん

い

すなわ

てか済わん」と云々。また云わく「深心と言うは、即ちこ

じんしん

こころ

にしゅあ

いち

けつじょう

じしん

れ深信の心なり。また二種有り。一には、決定して『自身

げん

ざいあくしじょうじ

ほんぶ

こうごう

このかた

つね

もつ

は現にこれ罪悪生死の凡夫なり。曠劫より已来、常に没し、

つね るてん

しゅつり

えんあ

じんしん

常に流転して、出離の縁有ることなし』と深信す。また云

に

けつじょう

か

あみだぶつ

しじゅうはちがん

しゅじょう

わく「二には、決定して『彼の阿弥陀仏の四十八願は、衆生

しょうじゆ

うたが

うらおも

か

がんにき

じょう

を摂受したもうこと疑いなく慮いなし。彼の願力に乗

ずれば、定めて往生を得』と深信す」云々。この釈の心

うえ 書 あらわ そろろう じようどしゆう かんじん もう

は上にかき顕して候。浄土宗の肝心と申すはこれなり。

われ まっだい ぼんぷ ねはんぎよう だいいち だいに とき

我ら末代の凡夫は、涅槃経の第一・第二なり。さる時に

しゃかぶつ おし しゆつり えんあ ほうぞうびく

釈迦仏の教えには「出離の縁有ることなし」、法蔵比丘の

ほんがん さだ おうじよう う し さんしん なか じんしん

本願にては「定めて往生を得」と知るを三心の中の深心と

もう どううんぬん

は申すなり等云々。

どうおしよう しぎ しゃくぜんじ もう ひと

これまた、導和尚の私義にはあらず。綽禅師と申せし人

ねはんぎよう にじゆうしへん 講 どんらんほつし いしぶみ もん み

の、涅槃経を二十四反こうぜしが、曇鸞法師の碑の文を見

た どころ ねはんぎよう す かんぎよう うつ のち ほうもん

て、立ち所に涅槃経を捨てて観経に遷つて後、この法門を

導どうには教おしえて候そうろうなり。鸞らん法師ほつしと申もうせし人ひとは齊せいの代よの人ひとな

り。漢かん土どにては時ときに独ど歩つぽの人ひとなり。初はじめには四し論ろんと涅槃ねはん經ぎようと

を講こうぜしが、菩ぼ提だい流りゅう支しと申もうす三さん藏ぞうに値あつて、四し論ろんと涅槃ねはんを

捨すて、觀かん經ぎように遷かえつて往おう生じようをとげし人ひとなり。三さん代だいが間あい、伝

えて候そうろう法ほう門もんなり。

漢かん土ど・日に本ほんには八はつ宗しゆうを習ならう智ち人じんも、正しょう法ほうすですに過すぎて

像ぞう法ほうに入いりしかば、か賢しひとこびとき人みな々じしゆうは皆す自じ宗じゆうを捨すてて浄じよう土どの

念ねん仏ぶつに遷うつりしことこれなり。日に本ほん国こくのてんいさんろんのえ恵え

心しんの往おう生じよう要じゆう集じきこれなり。三さん論ろんの永えい觀かんが十じゆう因いん・往おう生じゆう講こう式しき、

心しんの往おう生じゆう要じゆう集じきこれなり。三さん論ろんの永えい觀かんが十じゆう因いん・往おう生じゆう講こう式しき、

これらは皆この法門をうかがい得たる人々なり。法然上人

もまたしかなり云々。

にちれん い

日蓮云わく、この義を存する人々等も、ただ「恒河の

だいいち

だいに

いつこうじょうど

き

うんぬん

ほうもん

かんよう

第一・第二は一向浄土の機」と云々。これ、この法門の肝要

にちれん

ねはんぎよう

さんじゆうに

さんじゆうろく

ひら

み

だいいち

か。日蓮、涅槃経の三十二と三十六を開き見るに、第一は

ひぼうししようほう

いつせんだい

じようもつ

だいきよ

な

だいに

誹謗正法の一闡提、常没の大魚と名づけたり。第二はま

じようもつ

だいに

ひと

い

だいはだつた

くぎやり

ぜんしよう

た常没。その第二の人を出ださば、提婆達多・瞿伽梨・善星

とう

ひぼう

ごぎやく

ひとびと

せん

だいいち

等なり。これは誹謗・五逆の人々なり。詮ずるところ、第一・

だいに

ほうぼう

ごぎやく

ほうぞうびく

われほとけ

え

第二は謗法と五逆なり。法蔵比丘の「たとい我仏を得んに、

じつぼう しゅじょうししん しんぎょう わ くに う ほつ
十方の衆生至心に信樂して我が国に生まれんと欲し、
ないしじゅうねん しょうかく と

乃至十念して、もし生まれずんば、正覺を取らじ。ただ

ごぎやく ひぼうししょうほう のぞ うんぬん がん

五逆と誹謗正法とのみを除く」云々。この願のごときんば、

ほうぞうびく ごうが だいいち だいに す 果 そうら

法蔵比丘は恒河の第一・第二を捨てはててこそ候いぬれ。

どうおしょう まつだい ほんぷ あみだぶつ ほんがん

導和尚のごとくならば、末代の凡夫、阿弥陀仏の本願には

せん なか ひと な まつだい ほんぷ あみだぶつ ほんがん
ふげんぎょう

「千の中に一りも無し」なり。法華經の結經たる普賢經に

ごぎやく ひぼうししょうほう いちじょう き さだ たま

は五逆と誹謗正法は一乗の機と定め給いたり。されば、

まつだい ほんぷ ほけきょう じゅう すなわ じゅうししょう ひやく

末代の凡夫のためには、法華經は「十は即ち十生じ、百

すなわ ひやくししょう

は即ち百生ず」なり。

ぜんどうおしょう

ぎ

もう

せん

しあん

善導和尚が義について申す詮は私案にはあらず。

あみだぶつ むじょうねんおう

とき しゃばせかい

捨 たま

阿弥陀仏は無諍念王たりし時、娑婆世界はすでにすて給い

しゃかによらい ほうかいぼんじ

にんど と たま お

ぬ。釈迦如来は宝海梵志としてこの忍土を取り給い畢わん

じつぼう じようど しょうほう

ひぼう

ごぎやく いっせんだい

ぬ。「十方の浄土には正法を誹謗するものと五逆と一闡提

むか

あみだぶつ じつぼう ほとけ ちか たま

とをば迎うべからず」と、阿弥陀仏・十方の仏、誓い給い

ほうかいぼんじ がん い

すなわ じつぼう じようど

ひんずい

き。宝海梵志の願に云わく「即ち十方の浄土より擯出せら

しゆじよう あつ

われまさ

ど

うんぬん ほけきよう

るる衆生を集めて、我当にこれを度すべし」云々。法華経

い われひとり

よ く ご

とううんぬん

に云わく「ただ我一人のみ、能く救護をなす」等云々。「た

われいちにん

きようもん かた

そうち

しゃかによらい

だ我一人のみの」の経文は堅きように候えども、釈迦如来の

じぎ あみだぶつとう しよぶつ われ しやばせかい す

自義にはあらず。阿弥陀仏等の諸仏、我と娑婆世界を捨て

きやうしゆしやくそん

われいちにん

ちか

しやば

しかば、教主釈尊、「ただ我一人のみ」と誓つてすでに娑婆

せかい い たま

うえ

うたが

そうろう

世界に出で給いぬる上は、なにをか疑い候べき。

らん しやく どう

しん

かん

ねんとう

ろくにん

ひとびと

ちしや

にちれん

鸞・綽・導・心・観・然等の六人の人々は智者なり。日蓮

ぐしや

がくしやう

かみ

ろくにん

は愚者なり、学生にあらざるなり。ただし、上の六人はい

くに

ひと

さんがい

ほか

ひと

ろくどう

ほか

しゆじやう

ずれの国の人ぞ。三界の外の人か、六道の外の人衆か。

あみだぶつ

あ

たてまつ

しゆつけ

じゆかい

しやもん

そう

阿弥陀仏に値い奉つて、出家・受戒して沙門となりたる僧

いま

ひとびと

まさかど

すみとも

きよもり

よしともとう

すじやう

およ

か。今の人々は、将門・純友・清盛・義朝等には種姓も及ば

いとく

た

こころ

剛

もう

ちやう

ず威徳も足らず、心のごうさは申すばかりなけれども、朝

てき ひと ひとびと まさかど すみとも した

敵となりぬれば、その人ならざる人々も将門か純友かと舌

打 絡 もう か しそんとう 啓 よしとも

にうちからみて申せども、彼の子孫等もとがめず。義朝な

もう こうだいししょうけ じぶ こ うやま

んど申すは、故右大将家の慈父なり。子を敬いまいらせば、

ちち うやま そうろう ひとびと よしとも

父をこそ敬いまいらせ候べきに、いかなる人々も義朝・

ためとも もう すなわ おうぼう おも ぎやくしん つみ 報

為朝など申すぞ。これ則ち王法の重く、逆臣の罪のむく

かみ ろくにん

いなり。上の六人もまたかくのごとし。

しやかによらい よ い たま いちだい しょうぎよう と 置

釈迦如来、世に出でさせ給いて一代の聖教を説きおか

たも ごじゆうねん せつぼう われ あつ せんじん しょうれつ こもう

せ給う。五十年の説法を我と集めて、浅深・勝劣・虚妄・

しんじつ さだ しじゆうよねん しんじつ あらわ い こんとう

真実を定めて、「四十余年はいまだ真実を顕さず」「已今当

だいいち

とう

と

たま

たほう

じつぼう

ほとけ

しんじつ

第一」等と説かせ給いしかば、多宝・十方の仏、真実なり

かはん

たま

さだ

置

そうろう

か

ろくにん

と加判せさせ給いて定めおかれて候を、彼の六人は「い

しんじつ

あらわ

かんぎよう

よ

みな

しんじつ

まだ真実を顕さず」の觀經に依つて、「皆これ真実なり」

ほけきよう

だいいち

だいに

あくにん

もう

の法華經を、第一・第二の悪人のためにはあらずと申さば、

いま

ひとびと

かれ

賺

すうねん

へ

まさかど

すみとも

今の人々は彼にすかされて数年を経たるゆえに、将門・純友

とう

しよじゆうとう

かれ

もち

ひやくしやうとう

き

等が所従等、彼を用いざりし百姓等を、あるいは切り、

う

かれ

恐

したが

あるいは打ちなんどせしがごとし。彼をおそれて従いし

なんによ

かんぐん

責

か

ひとびと

いちじ

すいか

責

男女は、官軍にせめられて、彼の人々と一時に水火のせめ

あ

に値いしなり。

いま 日本国に、一切の諸の仏菩薩、一切の経を信ずる

ようなれども、心は彼の六人の心なり。身はまた彼の六人

の家人なり。彼の将門等は、官軍の向かわざりし時は、大将

の所従、知行の地、しばらく安穩なりしようなりしかども、

違勅の責め近づきしかば、所は修羅道となり、男子は厨者

の魚をほふるがごとし。炎に入り、水に入りしなり。今、

日本国もまたかくのごとし。彼の六人が僻見によつて、

今生には守護の善神に放されて三災七難の国となり、後生

には一業所感の衆生なれば、阿鼻大城の炎に入るべし。

ほけきよう だいご まき まつだい ほけきよう ごうてき ほとけしる お たま

法華経の第五の巻に末代の法華経の強敵を仏記し置き給

ろくつう ちかん うんぬん かみ ろくにん そんな

えるは「六通の羅漢のごとくならん」と云々。上の六人は尊

き ろくつう げん ちかん じょうれん

貴なること、六通を現ずる羅漢のごとし。しかるに、浄蓮

しょうにん しんぷ かれ ひとびと おんだんな ぶつきようまこと

上人の親父は、彼らの人々の御檀那なり。仏教実ならば、

むけんだいじよううたが

無間大城疑いなし。

くん こころ の しん おや く 息 こ

また、君の心を演ぶるは臣、親の苦をやすむるは子なり。

もっけんそんじや ひも がき く すく じようぞう じようげん じぶ

目犍尊者は悲母の餓鬼の苦を救い、浄蔵・浄眼は慈父の

じゃけん ひるがえ たま ふぼ いたい こ しきしん じょうれん

邪見を翻し給いき。父母の遺体は子の色心なり。浄蓮

しょうにん ほけきよう たも たも おんくどく じふ おんちから だいば

上人の法華経を持ち給う御功德は慈父の御力なり。提婆

だつた あびじごく お

てんのうによらい き おく たま

達多は阿鼻地獄に墮ちしかども、天王如来の記を送り給い

かれ ほとけ だいば どうせいいつか ゆえ

き。彼は、仏と提婆とは同姓一家なる故なり。これはまた

じぶ しそく じょうれんしようにん たも ほけきよう

慈父なり、子息なり。浄蓮上人の持つところの法華経、

か こしよりよう くどく ことおお もう

いかでか彼の故聖霊の功德とならざるべき。事多しと申

とど お さんべんひと 読 聞

せども、止め畢わんぬ。三反人によませてきこしめせ。

きようきようきんげん

恐々謹言。

ろくがつにじゆうしちにち

にちれん かおう

六月二十七日

日蓮 花押

かえ がえ 駿 河 ひとびと おな みこころ もう たま

返す返す、するがの人々、みな同じ御心と申させ給い

そちら

候え。